

# ヘーゲル左派日本語研究文献目録 (マルクス・エンゲルス・フォイエルバッハを除く)

柴田隆行編

## 凡例

- 1、本目録は2018年5月現在での、ヘーゲル左派関係の日本語文献目録である。
- 2、本目録から一部例外を除くマルクスとエンゲルス関連文献を抜いた理由は、点数が多くてフォローできないためとそれに関する文献目録は別にあるからである。フォイエルバッハ関連文献を抜いた理由は、柴田隆行編「フォイエルバッハ日本語文献目録(1994.09現在)」(石塚・河上・柴田編『神の再読・自然の再読——いまなぜフォイエルバッハか』所収)を別途作成してあるからである。
- 3、配列は公刊順とし、同年の場合は著者の五十音順とした。
- 4、本目録はいまだ不十分なものであり、多々遺漏や誤記があると思われる。お気づきの点があればぜひ編者までお知らせ願いたい。

煙山専太郎編著『近世無政府主義』、東京専門学校出版部、1902

マルクス・エンゲルス著、堺利彦・幸徳秋水訳『共産党宣言』、1904

大杉 栄「唯一者——マクス・スティルナー論」、『近代思想』1-12、1912

大杉 栄「意志の教育——マクス・スティルナーの教育論」、『近代思想』3-2、1915

スチルネル著、辻潤訳「万物は俺にとって無だ」、『生活と芸術』、1915

スチルネル著、辻潤訳「唯一者とその所有」全4回、『科学と文芸』、1918

スチルネル著、辻潤訳「唯一者とその所有(人間篇)」、日本評論社出版部、1920

スチルネル著、辻潤訳『自我経』、改造社、1921

スチルネル著、辻潤訳『自我経』、冬夏社、1921

辻 潤「『自我経』の読者へ」、『朝日新聞』1922年2月9日

マルクス・エンゲルス著、榎田民蔵・森戸辰男訳「『独逸的観念形態』第一篇フォイエルバッハ論」、『我等』5・6、1926

森戸辰男「スチルナーの無政府主義とマルクスの国家観」、『大原社会問題研究所雑誌』5-1、1927

森戸辰男「『唯一者』の結構」、『大原社会問題研究所雑誌』5-1、1927

スチルネル著、辻潤訳『唯一者とその所有』、春秋社(世界大思想全集、29)、1928

スチルネル著、辻潤訳「藝術と宗教」、春秋社(世界大思想全集、29)、1928

スチルネル著、辻潤訳「ユウゼエヌ・スウの『巴里の秘密』」、春秋社(世界大思想全集、29)、1928

スチルネル著、辻潤訳「誤まれる現代教育の原理——或は人道主義と現実主義」、春秋社(世界大思想全集、29)、1928

スティルネル著、生田長江・高橋清訳『唯一者とその所有』、平凡社(社会思想全集)、1928

- スティルネル著、草間平作訳『唯一者とその所有』上下、岩波書店（文庫）、1929
- スチルネル著、辻潤訳『唯一者とその所有』、改造社（文庫）、1930
- マルクス・エンゲルス著、榎田民蔵・森戸辰男訳『ドイッチェ・イデオロギー』、我等叢書第四分冊、1930
- マルクス・エンゲルス著、由利保一訳『ドイッチェ・イデオロギー』、希望閣、1930
- マルクス・エンゲルス著、三木清訳『ドイッチェ・イデオロギー』、岩波書店（文庫）、1930
- マルクス・エンゲルス著『マルクス・エンゲルス全集』第15巻：ドイッチェ・イデオロギー、改造社、1930
- 本多謙三「初期社会主義諸思想」、三木他『社会史的思想史』、岩波書店、1932
- モーク著、土方定一訳『ヘーゲル学派史』刀江書院、1932
- 陳紹馨「スチルナアのイデオロギー論」、新明正道編『イデオロギーの系譜学』、大畑書店、1933
- レヴィット著、坂田太郎訳「ヘーゲルおよびその学派の哲学の問題としての労働」、『哲学評論』3-5、1948
- 松尾邦之助『マックス・スティルナアの思想と生涯』、星光書院、1949
- 松尾邦之助「辻潤とスチルネル」、『ニヒリズム研究』2、1949
- 重田晃一「初期マルクスと青年ヘーゲル派」、『経済論集』（関西大）7-7、1958
- レーヴィット著、柴田治三郎訳『ヘーゲルからニーチェへ』上下 岩波書店、1952-53
- 広美源太郎「ボルンとシュレップフェル」、『学芸学部紀要』（和歌山大）8、1958
- 畑孝一「モーゼス・ヘスの社会主義」、『一橋研究』5、1959
- 山中隆次「少壮ヘーゲル学派のヘーゲル批判——その一典型としてのA・ルーゲ（1802-80）」、『経済理論』51,52、1959
- 東畑隆介「シュテファン・ボルンとドイツ労働運動」、『史学』（慶応大）32-4、1960
- 良知力「ドイツ初期社会主義における歴史構成の論理——ヴィルヘルム・ワイトリングとモーゼス・ヘスをめぐって」、『経済史林』27-3/4、1960
- 畑孝一「モーゼス・ヘスにおける人間の自己疎外把握について——ヘスとマルクスとの関係に関する考察」、『一橋論叢』46-1、1961
- 山中隆次「最近のヘス研究から」、『経済理論』60、1961
- 山中隆次「ヘスとマルクス——経済的疎外観を中心に」、『経済理論』62,63、1961
- 野地洋行「モーゼス・ヘスにおけるフランス社会主義——『社会主義と共産主義』をめぐって」、『三田学会雑誌』55-8、1962
- 畑孝一「オーギュスト・コルニユのヘス研究」、『一橋研究』8、1962
- 畑孝一「ヘスとマルクスにおける人間観と労働観」、『一橋論叢』50-1、1963
- 畑孝一「ヘスとマルクスの方法について」、『一橋研究』10、1963
- 向井守「ヘーゲル左派としてのマルクス」、桑原武夫編『ブルジョワ革命の比較研究』、筑摩書房、1964
- 山中隆次「チェシコフスキーのヘーゲル批判——マルクスへの道として」、『経済理論』（和歌山大）88、1965
- シュティルナー著、片岡啓治訳『唯一者とその所有』、現代思潮社、1966

渡部光男「キェルケゴールとヘーゲル左派」『キェルケゴール研究』3、1966.05 p.72-87

渡部光男「キルケゴールとヘーゲル左派」『酪農学園大学紀要』2(2)、1965.12 p.181-199

良知 力『ドイツ社会思想史研究』、未来社、1966

畑 孝一「ルカーチとコルニュのヘス研究」、『横浜商大論集』1-1、1967

山中隆次「ヘスとマルクス——ドイツ古典哲学とフランス社会主義の結合を中心にして」、  
経済学史学会編『資本論の成立』、岩波書店、1967

山本晴義「若きマルクスについて——マルクスとブルーノ・バウアーを中心に」、『大阪  
経大論集』66、1968

良知 力「初期マルクス発展史ノート(2)——ブルーノ・バウアーの批判『無神論者ヘー  
ゲル』を中心に」、『経済志林』35-1、1967

大井 正『唯物史観の形成過程』、未来社、1968

廣松 渉『エンゲルス論——その思想形成過程』、盛田書店、1968

メーリング著、足利末男他訳『ドイツ社会民主主義史』全2巻、ミネルヴァ書房、1968

良知 力「マルクスと真正理論のテロリズム」、1968

小沼大八「マックス・シュティルナーの無政府主義」、『倫理学年報』18、1969.3

良知 力「ヘスの妻とマルクス」、『未来』32、1969

良知 力「ヘスは若きマルクスの発展の座標軸たりうるか」、『思想』539、1969

坂本慶一『マルクスとユートピア』、紀伊国屋書店、1970

鈴木伸一「モーゼス・ヘスにおける共同体の原理」、『法文論叢』27、1970

ヘス著、山中隆次・畑孝一訳『初期社会主義論集』、未来社、1970

森川喜美雄「シュティルナー『唯一者とその所有』とマルクス——『ドイツ・イデオロギ  
ー』におけるブルードンの問題」、『社会科学年報』（専修大）4、1970

大井 正「ヘスとマルクスとの関係についての短篇」、『未来』55、1971

廣松 渉『青年マルクス論』、平凡社、1971

廣松 渉「フランス社会主義と初期マルクス」、『現代の眼』1971年4-7号

マクレラン著、宮本十蔵訳『マルクス思想の形成——マルクスと青年ヘーゲル派』、ミネ  
ルヴァ書房、1971

水戸豊夫「マックス・シュティルナーの無政府主義」、『情況』、1971.02

良知 力『初期マルクス試論』、未来社、1971

良知 力『マルクスと批判者群像』、平凡社、1971

コルニュ、W・メンケ著、武井勇四郎訳・解説『モーゼス・ヘスと初期マルクス』、未来  
社、1972

鈴木伸一「モーゼス・ヘスの歴史理論」、『法文論叢』30、1972

前田光夫「ユリウス・フレーベル『王制と国民主権』」、『水戸論叢』（水戸短大）7/9、  
1972

山中隆次「ブルーノ・バウアーとマルクス——ユダヤ人問題をめぐって」、『経済理論』  
127/131、1972

山中隆次『初期マルクスの思想形成』、新評論、1972

ルカーチ著、良知力・森宏啓二訳『モーゼス・ヘスと観念弁証法の諸問題』、未来社、  
1972

- 大井 正「マルクス主義の止揚——ヘーゲル学派の研究」、『現代思想』1-2、1973
- 村井久二「シュティルナーと『聖マックス』」、『信州大学教養部紀要』7、1973
- 大井 正「資料・ヘーゲル学派」、『季刊社会思想』3-3・4、1974 p180-224
- 片桐稔晴「シュティルナーとヘス」、『現代思想』1974年4月号
- 片岡啓治『逆光の西欧：シュティルナーからエンツェンスベルガーまで』白馬書房、1974
- 佐々木靖章「マックス・シュティルナー文献目録(資料)」『比較文学』17、1974.10.  
p.48-53
- 寿福真美「ヘーゲルと<実践の哲学>——ルーゲの『法哲学批判』」、『一橋研究』28、  
1974
- 田中治男「A・ルーゲとその時代——1840年代における政治的急進主義の形成」、『思想』599,601,605、1974
- 谷口健治「三月前期のモーゼス・ヘス」、『史林』（京都大）57-1、1974
- 廣松 渉「『ドイツ・イデオロギー』の国家論——マックス・シュティルナーに関連して」、『国家論研究』5、1974
- 山本晴義「最近の『若きマルクス研究』について——マルクスとモーゼス・ヘスを中心に」、『大阪経大論集』98、1974
- 良知 力編『資料ドイツ初期社会主義 義人同盟とヘーゲル左派』、平凡社、1974
- 良知 力「向う岸からの世界史——ヘーゲル左派とロシア」、『思想』601、1974
- 大井 正「シュトラウスとバウアー」、『現代思想』1975年11月号
- 大井 正「ヘーゲル学派研究のための視座」、『政経論叢』（明治大学政治経済研究所）  
43-1・2・3・4、1975 p23-53
- 大井 正「シュトラウス著『イエスの生涯』における神話と教条」、『政経論叢』44-2、  
1975
- 大井 正『マルクスとヘーゲル学派』福村出版、1975
- 加藤尚武「マルクス主義における「人間」の問題——シュティルナー評価をめぐって」  
『理想』504、1975.05 p.p104-118
- 千坂恭二「物象化論とシュティルナー——唯一者と唯物史観の相剋と異相」、『情況』  
1975年4月号
- 廣松 渉「『ドイツ・イデオロギー』とその背景——文献学的研究から内容的討究への架  
橋のために」、『知の考古学』1,2,5/6,7/8、1975
- 別府芳雄「青年ヘーゲル学派とマルクス」I-V、『千葉敬愛経済大学研究論集』  
9,10,12,14,16、1975-79
- 山本晴義、『若きマルクスとその批判者たち』、福村出版、1975
- レーヴィット著、麻生建訳『ヘーゲルとヘーゲル左派』、未来社、1975
- 大井 正「D・F・シュトラウスのなかのヘーゲル」、『情況』101、1976 p204-231
- 大井 正「ヘーゲル学派の分裂——その発端について」、『政経論叢』45-1、1976 p1-55
- 大沢正道「マックス・シュティルナーの弁護」、『情況』101、1976 p248-262
- シュラーヴェ著、石川三義訳「『ベルリン年誌』に見るヘーゲル学派の展開」、『情況』  
101、1976 p318-333
- 武井勇四郎「チェルヌィシェフスキーの歴史哲学——ロシア・ヘーゲル左派」、『情況』

101、1976 p298-317

谷口健治「ヘスとマルクス」、『史林』（京都大）59-1、1976

山本 啓「ヘーゲル左派と若きマルクス」、『国家論研究』8、1976

山本 啓「ヘーゲルの国家観とアーノルト・ルーゲ——哲学から政治への転換」、『情況』101、1976 p263-297

山本晴義「若きマルクスに関する一考察、3——マックス・シュティルナーを中心にして」、『大阪経大論集』114、1976

村上俊介「ブルーノ・バウアーにおける自己意識の哲学——3月革命前夜の自由主義的『ラッパ』」、『経済と法』（専修大）8、1977

良知 力「プルドン主義者カール・グリューン」、『現代思想』1977年4月号

石川三義「青年ヘーゲル派ブルーノ・バウアーの哲学について」、『明治大学大学院紀要』15、1977

石川三義「青年ヘーゲル派の政治批判とエドガー・バウアー」、『明治大学大学院紀要』16、1978

石塚正英「アーノルト・ルーゲのロマン主義批判」、『立正史学』44、1978

大庭 健「ヘーゲル宗教哲学のバウアー的転覆——近代的主体の先験的反省の行方を追って」、『現代思想』408、1978 p390-407

国分 幸「チェシコフスキーの行為の哲学」、『現代思想』408、1978

藤井哲郎「ヘーゲル左派の国政批判とジャーナリスト時代のマルクス」、『六甲台論集』（神戸大）24-4,25-1、1978

星野 智「シュティルナーのヘーゲル左派批判」、『理想』540、1978

星野 智「シュティルナーにおけるヘーゲル主義」、『現代思想』408、1978

村上俊介「ブルーノ・バウアー批判としての『経済学・哲学草稿』」、『専修経済学論集』13-1、1978

山本 啓「三月前期とヘーゲル、ルーゲの国家観」、『現代思想』408、1978

村井久二「マルクスにおける"Gattungswesen"概念の使用停止と、それに対するマックス・シュティルナーの影響(解説と翻訳)」、『信州大学教養部紀要』12、1978.03 p.p93-108

石川三義「ヘーゲルとブルーノ・バウアーの思弁哲学」、『明治大学大学院紀要』17、1979

石塚正英「アーノルト・ルーゲの自由主義批判」、『立正西洋史』2、1979

チェシコフスキー著、国分幸訳「歴史学へのプロレゴメナ」、『法経論集』（静岡大短大）42,43、1979

別府芳雄「青年ヘーゲル学派とマルクス——5-マックス・シュティルナー」『千葉敬愛経済学研究論集』16、1979.06 p.p1-28

吉田憲夫「若きマルクスの理論形成」、『古典経済学と産業』、早稲田大学産業経営研究所、1979

神田順司「行為の哲学とドイツ初期社会主義——チェシコフスキー、ヘスにおける歴史構成の論理」、『史学』（慶応大）50、1980

ジョン・キャロル著、松原公護他訳『水晶宮からの脱出：アナルコ=サイコロジー的批判シュティルナー、ニーチェ、ドストエフスキー』未来社、1980.8

- 廣松 渉著・井上五郎補註『マルクスの思想圏』、朝日出版社、1980
- 星野 智「十九世紀のヨーロッパ＝ロシア像——ヘーゲル左派の『行為の哲学』の歴史観」、『法学新報』（中央大）87-5・6、1980 p71-97
- 山中隆次「モーゼス・ヘスにおける歴史と階級」、『歴史研究と階級的契機』、中央大学出版部、1980
- 良知 力「青年ヘーゲル学派」、『グランド現代百科事典』、学習研究社、1980
- 村上俊介「ブルーノ・バウアーの『大衆論』と『聖家族』」、『経済と法』（専修大）14、1981
- 大井 正「ヘーゲル学派とローレンツ・シュタイン」、『政経論叢』（明治大）50-5/6、1982
- 片桐稔晴「ブルーノ・バウアーと『自己意識の哲学』」、『経済学論纂』23-5、1982
- 滝口清栄「M・シュティルナーにおける唯一者と連合の構想——青年ヘーゲル派批判とその意義」、『法政大学大学院紀要』9、1982
- 油木兵衛「M・シュティルナーの＜教育＞観」、『米子高専研究報告』18、1982
- 石塚正英『年表・三月革命人——急進派の思想と行動』、秀文社、1983
- 石塚正英『三月前期の急進主義』、長崎出版、1983
- 神田順司「モーゼス・ヘスとヘーゲル主義の問題——ヘーゲル左派における世界史構想の二律背反をめぐる」上下、『史学』52-3・4、53-1、1983
- 近田錠二「アーノルト・ルーゲ研究の基本視座——東西ドイツにおける最近のルーゲ研究に寄せて」、『経済科学』（名大）31-1、1983
- フック著、小野八十吉訳『ヘーゲルからマルクスへ』、御茶の水書房、1983
- 村上俊介「カール・グリュンにおけるブルードン主義——マルクスとの対立に即して」、『専修大学北海道短期大学紀要』16、1983
- 黒岩正昭・服部文男「『共産主義者同盟・文書および資料』の意義について」、『科学と思想』51、1984
- ブルーノ・バウアー著、林真左事訳「類と大衆」、『社会思想史の窓』5,6、1984
- 村上俊介「カール・グリュンとブリュッセルのマルクス」（上）、『インパクション』32、1984
- 石塚正英「ヘルマン・クラーゲの根本思想——H・シュリューターの提供する本邦未紹介資料に即して」『インパクション』29、1984.05
- 村上俊介「カール・グリュンとブリュッセルのマルクス（上）（下）」『インパクション』32-33、1984.11、1985.01
- 大井 正『ヘーゲル学派とキリスト教』、未来社、1985
- 片桐稔晴「ブルーノ・バウアーと『ユダヤ人問題』——著作『ユダヤ人問題』における『自己意識の哲学』の展開」、『経済学論纂』（中央大）26-4、1985
- 滝口清栄「義人同盟とカール・シャッパー——同盟改組問題へのアプローチのために 1-4」『インパクション』35、37、38、40、1985.05、09、11、1986.03
- 野村真理「後期モーゼス・ヘスにおけるユダヤ民族への回帰」、『一橋論叢』93-5、1985
- 油木兵衛「M・シュティルナーの初期著作」、『米子高専研究報告』22、1986
- 片桐稔晴「ブルーノ・バウアーと国家」、『経済学論纂』27-6、1986

- 林真左事「ブルーノ・バウアーをめぐる若干の問題」、『社会思想史の窓』21、1986
- 良知 力・廣松渉編『ヘーゲル左派論叢』第1巻「ドイツ・イデオロギー内部論争」、御茶の水書房、1986
- モーゼス・ヘス著、山本耕一訳「最後の哲学者たち」
- マックス・シュティルナー著、星野智・滝口清栄訳「シュティルナーの批評家たち」
- ブルーノ・バウアー著、山口祐弘訳「ルートヴィヒ・フォイエルバッハの特性描写」
- モーゼス・ヘス著、山本啓訳、ドットーレ・グラツィアーノの著作、A・ルーゲ著『パリの二年間、研究と思い出』
- 良知 力・廣松渉編『ヘーゲル左派論叢』第3巻「ユダヤ人問題」、御茶の水書房、1986
- ブルーノ・バウアー著、篠原敏昭訳「ユダヤ人問題」
- カール・グリューン著、植村邦彦・篠原敏昭訳「ユダヤ人問題。ブルーノ・バウアーへの反論」
- グスタフ・ユリウス著、村上俊介訳「可視的人間教会と不可視的人間教会との争い、または批判的批判の批判の批判」
- モーゼス・ヘス著、野村真理・篠原敏昭訳「ローマとエルサレム」
- 尾崎恭一「精神発達における自己意識の形成陶冶について——シュティルナーのヘーゲル受容」、『白山哲学』（東洋大学）21、1987
- 村井久二「マックス・シュティルナー著「シュティルナーの批評家達」」『中央大学論集』8、1987.03 p.p41-74
- 良知 力・廣松渉編『ヘーゲル左派論叢』第4巻「ヘーゲルを裁く最後の審判ラッパ」、御茶の水書房、1987
- ブルーノ・バウアー著、大庭健訳「ヘーゲルを裁く最後の審判ラッパ」
- ブルーノ・バウアー著、渡辺憲正訳「暴かれたキリスト教」
- 良知 力『ヘーゲル左派と初期マルクス』岩波書店、1987
- 大沢正道『個人主義——シュティルナーの思想と生涯』、青土社、1988
- 野村真理「報告 ドイツ3月前期におけるヨーロッパ中心主義的反ユダヤ主義——ヘーゲル左派および初期社会主義者の歴史構想によせて(近代反ユダヤ主義研究の現状と問題点(日独歴史学シンポジウム))」『歴史学研究』585、1988.10 p.10-13
- 渡辺憲正「マルクスとバウアーの接点(1843—44年)」、『社会思想史の窓』55、1988
- 神田順司「行為の哲学と『ドイツのみじめさ』——同一性の哲学との連関において」、『社会思想史の窓』58、1989
- 篠原敏昭「反ユダヤ主義者としてのブルーノ・バウアー——後期の思想展開との関連で」、『社会思想史の窓』67、1989
- 滝口清栄「L・フォイエルバッハの思想的転回とシュティルナー」、『社会思想史の窓』55、1989
- 村上俊介「ブルーノ・バウアーの三月革命観」、『社会思想史の窓』63、1989
- 大井 正「ヘーゲル学派とローレンツ・シュタイン」、大井正・西尾孝明編『ドイツ社会主義研究』、勁草書房、1989
- 森 政稔「ブルーノ・バウアーと進歩のアイロニー」、『社会科学研究』（東大）40-5、1989

- 渡辺憲正『近代批判とマルクス』、青木書店、1989
- 生方 卓「ヘーゲル学派の社会哲学、特に経済学について——ヘーゲル右派・中央派」  
『社会思想史の窓』70、1990
- 尾崎恭一「シュティルナーにおける人格主義の理念」、『白山哲学』24、1990
- 柴田隆行「ヘーゲル学徒としてのシュタイン」、『社会思想史の窓』74、1990
- 滝口清栄「ヘーゲルの財産共同体批判」、『社会思想史の窓』72、1990
- 田村伊知朗「エドガー・バウアーの初期著作目録 1842 - 1849」、『法政大学大学院紀要』25、1990
- 野村真理「ユダヤ人問題——西欧とユーデントゥームのはざま」、『社会思想史の窓』68、1990
- 村上俊介「ブルーノ・バウアーの三月革命観——『ドイツにおける市民革命』を素材として」上下、『専修経済学論集』24-2,25-1、1990
- 住吉雅美「マックス・シュティルナーの近代合理主義批判 1-10」『北大法学論集』42  
(2)(3)(6), 43(2)(3)(4)(6), 44(6), 45(1/2)(6) 1991-1995
- 的場昭弘「『独仏年誌』と独仏関係」、『ユスティティア』（ミネルヴァ書房）2、1991
- 村上俊介「マルクスと『真正社会主義』」、『情況』2-11、1991
- 石塚正英編『ヘーゲル左派——思想・運動・歴史』、法政大学出版局、1992
- 渡辺憲正「フォイエルバッハの非哲学の哲学」
- 滝口清栄「ヘーゲル批判の思想圏——シェリング、バウアー、フォイエルバッハと疎外論
- 尾崎恭一「シュティルナー哲学のプロブレマティーク」
- 柴田隆行「ヘーゲル左派と若きローレンツ・シュタイン」
- 的場昭弘「ルーゲとフランス——ヘーゲル左派と独仏関係」
- 石塚正英「義人同盟とヘーゲル左派」
- 林真左事「ブルーノ・バウアーにおけるヘーゲル左派の総括」
- 田村伊知朗「エドガー・バウアーの思想的転回」
- 村上俊介「ブルーノ・バウアーと三月革命——もう一つの『市民を求めて』」
- 篠原敏昭「ブルーノ・バウアーの反ユダヤ主義——後期バウアー研究のために」
- 野村真理「後期モーゼス・ヘスにおける民族的世界の復権」
- 岩佐・小林・渡辺編『「ドイツ・イデオロギー」の射程』、創風社、1992
- 尾崎恭一「人間観の確立とシュティルナー批判」
- 木村 博「宗教批判と自己意識——ブルーノ・バウアー、フォイエルバッハとマルクス」
- 渡辺憲正「マルクスのフォイエルバッハ批判の意味」
- 稲垣正巳「唯一者について——サドとシュティルナー」『愛知学院大学教養部紀要』40(2)、1992 p.31-52
- 岩波哲男「歴史、出来事と史実——ヘーゲルとシュトラウス」、『文学研究科紀要、哲学・史学編』（早稲田大学大学院）39、1993 p3-18
- 滝口清栄「ヘーゲル宗教哲学解釈論争とヘーゲル左派」、『現代思想』21-8、1993
- 植村邦彦「マイノリティの『解放』をめぐる——ヘーゲル左派と『ユダヤ人問題』」、



- 『理想』 653、1994.05 p58-67
- 生方 卓「ヘーゲル、ガンズと死刑の問題」、『理想』 653、1994.05 p32-47
- 小林昌人「歴史の哲学と行為の哲学——ヘーゲル左派の行為論における必然性・目的性・主体性」、『理想』 653、1994.05 p88-104
- 座談会「ヘーゲル左派と世界」（石塚正英・生方卓・小林昌人・柴田隆行・滝口清栄・的場昭弘、『理想』 653、1994.05 p2-19
- 柴田隆行「社会主義をめぐる理論と実践——ヘス対シュタイン」、『理想』 653、1994.05p77-87
- シュトラウス著、生方卓・柴田隆行・石塚正英・石川三義訳『イエスの生涯・緒論』、世界書院、1994
- 滝口清栄「伝統との断絶、あるいは知の転換——シュティルナー思想の現代的意味をめぐって」、『理想』 653、1994.05 p68-76
- 鄭文吉著、姜聖信訳・小林昌人補綴「ヘーゲル左派の時代——バウアーとマルクスの知的連携」、『理想』 653、1994.05 p117-133
- 田村伊知朗『近代ドイツの国家と民衆——初期エトガー・バウアー研究(1842-1849年)』、新評論、1994.09
- 的場昭弘「ガンズとフランス——ヨーロッパ連合構想」、『理想』 653、1994.05 p48-57
- 小林昌人「平等と自由と共産主義」、『情況』 95.2/3、1995.02 p83-98
- 柴田隆行「1840年代ドイツの社会主義と共産主義——ローレンツ・シュタインによる概括を通して」、『情況』 95.2/3、1995.02 p21-39
- 的場昭弘『パリの中のマルクス——1840年代のマルクスとパリ』、御茶の水書房、1995.04
- 柴田隆行「フィヒテと『行為の哲学』」、『理想』 655、1995.05 p145-156
- 田村伊知朗「『ヘーゲル左派』研究のヨーロッパにおける新しい動向」、『社会思想史の窓』 115、1995.06 p1-6
- 寿福真美『批判的理性の社会哲学——カント左派とヘーゲル左派』法政大学出版局、1996
- 田村伊知朗「初期カール・ナウヴェルク研究序説——自由主義的政治思想とヘーゲル左派」『法政大学教養部紀要』 101/102、1997 p.53-78
- 住吉雅美『哄笑するエゴイスト：マックス・シュティルナーの近代合理主義批判』風行社、1997.6
- 的場昭弘・高草木光一編『一八四八年革命の射程』御茶の水書房、1998
- 山本雄一郎「マルクスのシュティルナー批判」『商大論集』 49(6) 1998.03 p.1071-1103
- 石塚正英編『ヘーゲル左派と独仏思想界』御茶の水書房、1999
- 序章 「ヘーゲル左派と独仏思想界」報告会参加者あいさつ
- 第一報告 マルクスとB・バウアーの接点（1843-44年） 渡辺憲正
- 第二報告 L・フォイエルバッハの思想敵展開とシュティルナー 滝口清栄
- 第三報告 行為の哲学と「ドイツ的にじめさ」——同一性の哲学との連関において 神田順司
- 第四報告 ブルーノ・バウアーの三月革命観 村上俊介
- 第五報告 反ユダヤ主義者としてのブルーノ・バウアー——後期の思想展開との関連で

篠原敏昭

第六報告 ユダヤ人問題——西欧とユードントゥームのはざま 野村真理

第七報告 ヘーゲル学派の社会哲学、特に経済学について——ヘーゲル右派・中央派  
生方卓

第八報告 ヘーゲルの財産共同知批判 滝口清栄

第九報告 ヘーゲル学徒としてのシュタイン 柴田隆行

補章 西欧における「ヘーゲル左派」に関する討論——ハンブルク・1995年 田  
村伊知朗

小林昌人「『ドイツ・イデオロギー』の配列問題——ヘーゲル左派論争の視角から」『社  
会思想史研究 社会思想史学会年報』23、1999

田村伊知朗「近代福祉国家の形成期における自由主義と協会——ドイツ三月前期における  
ヘーゲル左派、カール・ナウヴェルクの思想を中心にして」『法政大学教養部紀要』  
110、1999 p.107-124

鈴木一男「シュティルナーの宗教観」『仏教教育・人間の研究：斎藤昭俊教授古稀記念論  
文集』2000.6

長縄光夫『アレクサンドル・ゲルツェンの思想を中心とする近代ロシア社会思想の包括的  
研究』横浜国立大学、2001-2004

田村伊知朗「歴史的世界の把握をめぐる思想史的考察——初期カール・シュミット(Karl  
Schmidt 1819-1864年)のヘーゲル左派批判を中心にして」『法政大学教養部紀要』121、  
2002 p.35-56

林 淑美「シュティルナーの末裔と「批評の人間性」——「文学的自由主義」とのたたか  
い」『季報唯物論研究』79、2002.2 p.87-104

鈴木一男「"哲学者"としてのシュティルナー」『哲学年誌』8、2002.3 p.140-152

的場昭弘「廣松渉のマルクス研究——シュティルナーの意義」『情況 第三期』20、2002.7  
p.243-255

滝口清栄「もう一つの『ドイツ・イデオロギー』——「聖マックス」とシュティルナー-  
フォイエエルバッハ」『情況 第三期』27、2003.4 p.124-132

鈴木一男「シュティルナーの「所有」概念——「おびやかされている所有」をめぐる」  
『比較思想研究』31、2004 p.41-49

中村 誠「金子光晴の「連合」への夢——疎開中の詩とマックス・シュティルナーを手が  
かりに」『国語と国文学』967、2004.6 p.39-53

住吉雅美「エゴイストは「他者」の夢を見るか？——シュティルナーと正義論の脱構築」  
『思想』965、2004.9 p.123-139

青木 健「マルクスにおける認識論的切断の契機——シュティルナーの唯一者を中心に」  
『大阪産業大学経済論集』6(2)、2005.2 p.117-139

田村伊知朗「ヘーゲル左派の思想総体における初期エトガー・パウアーの政治思想の位置  
づけ——初期カール・シュミットとの連関を中心にして」北海道教育大学函館人文学  
会『人文論究』74、2005 p.1-11

青柳宏幸「マルクスにおける「教育学的」意識の清算：マックス・シュティルナー批判を  
手がかりとして」『教育哲学研究』93、2006 p.49-66

- 石塚正英「相馬御風とシュティルナー自我論」『理想』677、2006 p.100-114
- 鈴木一男「「所有」と「享受」——シュティルナー哲学の行方」『比較思想研究』33、2006 p.14-17
- 谷口 力「シュティルナーの自我論における認識論的無矛盾性について」『哲学年誌』38、2006 p.45-71
- 良知力・廣松渉編『ヘーゲル左派論叢』第2巻(行為の哲学)、御茶の水書房、2006  
 チェシコフスキ著、柴田隆行訳「歴史知序論」  
 モーゼス・ヘス著、針谷寛・前田庸介訳「人類の聖史」  
 モーゼス・ヘス著、神田順司・平子友長訳「ヨーロッパの三頭政治」
- 田村伊知朗「後期近代におけるヘーゲル左派研究の思想史的基礎づけ——初期カール・ノウヴェルクの政治思想を中心にして」『北海道教育大学紀要. 人文科学・社会科学編』56(2)、2006.02 p.79-86
- 滝口清栄『マックス・シュティルナーとヘーゲル左派』理想社、2009
- 滝口清栄「アナーキーあるいは夢想の革命——シュティルナー、マルクス、バクーニン」『理想』682、2009 p.60-70
- 千坂恭二「シュティルナーとマルクス——「唯一者」と「社会的諸関係の総体」」『情況 第三期』84、2009.6 p.85-96
- 田村伊知朗「初期ブルーノ・バウアー純粹批判に対する周辺ヘーゲル左派による基礎づけ」『北海道教育大学紀要. 人文科学・社会科学編』61(1)、2010 p.99-109
- 松尾隆佑「エゴイズムの思想的定位——シュティルナー像の再検討」『情況 第三期』92、2010.3 p.196-210
- 植村邦彦「書評『マックス・シュティルナーとヘーゲル左派』(滝口清栄著)」『社会思想史研究 社会思想史学会年報』35、2011 p.177-181)
- 河野桃子「前後期シュタイナーを貫く「世界自己」としての「私」という観点：シュタイナーのシュティルナー解釈に見られる倫理観に着目して」『教育哲学研究』104、2011 p.77-95
- 片山善博「書評 滝口清栄著『マックス・シュティルナーとヘーゲル左派』を読む」『法政哲学』7、2011 p.55-58
- 生方智子「モデル化される辻潤：大正期におけるシュティルナー受容と「個人」の位置」『立正大学人文科学研究所年報』51、2013 p.35-45
- 田村伊知朗「初期テオドール・オーピッツ研究の基礎構築——ヘーゲル左派研究史におけるテオドール・オーピッツ初期著作目録(1842-1850年)の意義」『北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編』63(2)、2013 p.29-41
- シュティルナー著、片岡啓治訳『唯一者とその所有 上下』(古典文庫 21)、現代思潮新社、2013.01
- 鈴木一男「シュティルナーの教育観：現在の私たちの教育現場に突き合わせて」『日本仏教教育学研究』(22)、2014.3 p.164-183
- 山本 良「中上健次とマックス・シュティルナー：「十九歳の地図」における〈言語〉と〈労働〉」『埼玉大学国語教育論叢』17/18、2014-15 p.13-29
- 山本 愛「A・ルーゲにおける「国家」と「自由」——ルーゲの書簡等を手がかりとし

て」、東北大学『ヨーロッパ研究』10、2015 p.293-311  
石塚正英『革命職人ヴァイトリング コミューンからアソシエーションへ』社会評論社、  
2016